

号

報時了黎爾亞
錄附藝文

号六廿六

卷五第



28 JUNIO
DE
1930

AÑO V
Núm. XXXVI

Suplemento Literario
"EL ARGENTIN DJWO"

ヤナヒト 元

藤城と定めた階下のうすぎたない六畳の万年床の
上にゴロリと寝込んで一本七厘のバットを茶の煙の
輪にしようは、はき出しはき出ししてゐた彼ではあつ
たが、何時の頃から下水の向ふの、手家の格子窓に
現はれてその窓外に吊るされた手水鉢の突起を
押して流れ出る水に白い指先を洗ふメリアスタの
姿をみとめてからは、万年床をすて、彼女の姿を見る爲
に窓の前で一本七厘を煙と染へる様にふり、冬の目
と難とも窓を明け放しにして置くと、何れでもふ
ハ様になつた。

手水鉢の吊るされたその窓の内を彼女が行きすぎ
てカタンと木の扉の閉まる音を聞くと、彼はいつもの
様にその次に聞こえる音を病的に突つた神経でハ
ツギリ聞いては一人悦に入つた。

もう一度扉の音を聞いて彼女が格子窓の外に、そ
の手を洗つた時、下水のこちらの彼のニマク、笑ひに
会つたのだから時、場所、場所だけ彼女もや、
狼狽して

「ヤナヒト」
と言つた。

その時彼女は彼が呼ぶメリアスタの所似たる歪ん
だ笑ひを送つたのだから、ヤナヒトを好意の反語として
彼は解釈した。
かくして歪んだ笑顔を彼の脳裡に克明に刻みつけ
て彼女が去つてしまふと三尺に足りない下水を煙の同
に望のてゐた。

「アノ一寸すみませぬ」
彼女が下水の向ふから彼女の洗濯物を掛けた物干竿
を突き出して

と云つた時、「アイヨ」と云ふ軽いユウモラスな返事が出
来る彼ではなかつた。彼は無言の内にその竿を掛け
て下水の上に吊した。

下水を挟んだ彼女との間を最初結ぶつたのは
この物干竿であつたが、其れに掛つた物干竿三尺たては
女の腰を一巻して二尺程重なる長さのその布は危
険信号旗の様に赤くヒラ／＼と風にゆれてゐた。

「ア、チヨイトすみませぬ」此の先解いて頂戴な
彼女が下水の向ふでその物干竿を受取つた時、干物
の数がたりふいと思つたが、クリツツに狭んだ腰巻が
落ちる筈はふし／＼と溢される品でもないと彼女
は思へたので自分の考へ違としてしまつた。

ぬすまれる品でない其の品は、其の夜から彼の腰に巻
かれてゐた。

「ヤナヒト」
彼女が知つたら必ずさうさ小彼の行爲であつた。

其の後二ヶ月も仕送り、断えてゐたので、彼は午前
中は床の中に居て朝晝を一食すまふし一日二食すま
ふ。だがこのまゝでゐればそれすら止めねばならぬ
事はあきらめがあるので、何のやうにもならぬ水
をなげ出して頼りない就職口を探し歩く事にした。

彼はやうやくペンキ屋に職を見附けた頃、妙とメ
リ！アスタとの間は物干竿の様な水平面の上の一立
線で単純に続けられてゐる事は出来なかつた。
彼の頭上の一つまり彼の居る垂直線の上の一室でもあ
してゐるメ、メさんとメリアスタとの噂が彼の耳へ
も時々聞へて来た。

「まあ、何やら、西洋物の活動に出まくる女が
する。ホラ、校キスとゴキスの女の二階の××
さんにするの、いやつたらありやしない」
女中が驚くべき能辨を語る通り、此の直前三角瓶の
關係に於て斜辺上の秋愁の往復はほけしいだけ
後をいたく悩ました。
切前出来さうだった彼と彼女との間にある下水の
橋が妙に空間からの差敵に壊されたのだから彼が
あせるのも無理はない事である。
彼は彼女との間の下水を思切つて一足飛びに飛び越
えるラブレターを郵便屋の手によつて彼女に送つたそ
の返事ごとく「来ない」と知つた時、彼と彼女は下水
を隔て、顔と突合せた。
「ヤナ」
「メリ！アスターは去つた。」
彼はその時、二人の間の狭い下水を飛びこねて、バ
チマンと其汚水の中に落ちた手をハッキリ意識せず
にはおられなかつた。
彼の恋は、ヤナに、初まり、ヤナに、終つた。
「まあ、大妻の、××さん、五月も下旬代を踏み
倒して逃げちやつたの、そして向ひの女も夕べから帰
へらふいですつて、××さんと来たからフツン、うち
の、で、もう帰つて来ないワ、きつと、あの女も馬鹿
ね、男にだまされ、
と無限に続く女中の舌のほとほりもさめ、冬も去つて
初春となつたが彼のエウウツには、妻リがなかつた。
人の心を興奮させたトツカビンの空瓶や、ビール瓶ぶ
た、其の下水に浮いて彼の前を過ぎた。
突然、叔父からこれでお前の父の遺産はおしま
いと云つて、五十七円送つて来た。
彼はその夜、其の金を握つて、不可思議な街と犬の

様にウロウロ歩いて来た。
うすうすたふい二階窓が、クモのフミの様にねつてゐる
狭い路の両側に並んでゐるその家は、格子窓を開け放
して、その内の障子に切りぬかれた硝子窓から、女が往
来を見張つてゐた。
「チヨイト、チヨイト、兄さん、
おさげの女も居た。
シマダ、乗髪の女も居た。
「チヨイト、先生、
先生と彼を呼ぶ女も居た、どの女も元気がなかつた。
用はないよ、一文おし、
行き過ぎる彼を罵る女もあつた。
この時間にも野良犬の様な男が二、三人立ちすくんで
居た。
彼はやつと街の場末へ来た。
一方は沿らしく、其反対側は人も住まう居やうもな
い暗い家で、石炭ガラの路がサク／＼と音をたてた。
もうな／＼と思つた場末の、一つ家から呼ばれた時、障
子の切りぬきの内に、束髪の少女を、チヨイトと見た。
数回行きすゞ、闇の中に立ち停つた彼は、躊躇す
かへして、今度は、チヨイトと云はれぬ先に、其の家に飛
び込んだ。
「マア、
と云ふ女を見れば、それはメリ！アスターに違ひなかつた。
「ヤナ、
彼女は呆然たる彼の手を引いて、二階へトントントン
と上つて行つた。
(終り)

詩

裸体の女と青空

比嘉廉永

私は裸体の女と
青空を愛します
ふせつて
竊然たる私の未来と
永遠に—優しき瞳をして
眺めてくれるのは
この二つだけだから—

工場街

工場街
比嘉廉永
娘は
夕暮を去る労働者の足音は
寂しいものです
随て、街頭の燈もつくでせう
そして娘の直蒼な顔が
街一ぱいにひろがるでせう
つかれた工場街の
×ランコリー不夜です

彼岸を凝視して

蘇南

雨・風・むにもものを
進むがま、に進むのだ
希望は輝やく、血は燃える
生活への前進だ。

親友・悪人
捨つべき時は捨て
勇往邁進ひたすら
彼岸を見つめて進むのだ。

奮闘・奮闘
ベストを盡して突進す
天啓命するまに
生活へのジヤスは高鳴る。

太陽は吾が歩道を照らす
真直に勇猛にそして清く
示した道を辿らん
心地良き行進曲だ。

一九三〇・六・四

労働礼讃

蘇南

コツコツ手は動く
練瓦はなうんで行く
道路の修繕だ
やがて美を現はす道路だ

赤い血潮の高鳴りに
汗みどろにホつて働く
希望に燃えた労働だ
永しき深い生活への行進曲だ

なぐくく 何処までも
道路の限らるまで
人の世のつづく限り
コツコツ動く手は止まぬ

短り秋の日だ
手は動く足は踊る
夕陽に響く鐘の音に
帰宅に忙しき労働者だ

一日の労苦も終へて
晩餐に妻子との團欒だ
勤怠に満ちた晩餐だ
汗と血潮のさしる音響だ

旅愁

蘇南

すみきつた空に
星が冷たそうです
お月様もまんまるで
静かな秋の夜です
さびしきま、に外に出ると
冷たい空気が身に沁みます

廻りは死界のやうだ
静かに影が追ひます

狂はしい愁傷に
夜長の秋は寂し
思ひは広い海を越えて
故郷の空に彷徨ます

ちらりと空が流れます
お月様も見えます
夜空を通して汽車の響が聞えます
寺殿の鐘が死界への旅を速めます

一九三〇・六

カバレーの夜更

夜 左

どんよりした眼が
一つだけ見つめると
吐息と一緒に
うすきみ悪い嘲笑だ

煙草の煙が
すいみづ桃の様か
乳房をほぐして
又酒だ

送熊が
ジャズと煙草の

コクテルに
女の曲線と
だんくはつきりさせること

カバレーの
夜は更けるのです

バイレ
夜 左

頬と頬がふれあふと
ジャズが
なやましそうだ

ボジェラの中で
ふくらばぎが
ヤカ動すると
シマンテリアまで
まぶしそう

男と女
腰と腰

一杯の
クバーンが
血管の中で
情欲の
チマレストン

一九三〇・六・三三

民謡

外国の夢 秋嶺

私にや遠い日本から来たよ
何故にそなたは目をみはる
黄色に染った色だどて
めは赤育ちに何かはる

黒い瞳が気にかかるか
なぜにそなたは目をみはる
瞳見る目は同じこと

知らぬ他國に来たけれど
私しや独身者気がさうい
青い眼々した娘
悲に國境のあるもの

私しやそなたに惚れたとて
此の世にせめる人もなし
来しその日を返らうよ
愛に人の差別があるもの

私しや此の世の渡人
思ひのまにわしやうこく
来しなれば返さぬ
そなたとなればとこまでも



ふしあふ 南秋男

靴の音が四方に反響する。人通りは少ない。街燈は淡い光を地上に投げつけて居る。寒く、一層身に沁みて死んだ様な街は淋しい。

「今晚は……」
未だぬる。未だぬる。若い御連中。寒さもなんのその。早やダンスの真早中だ。
踊る。踊る。ジヤズにつれて。赤いヴェスチードがひらく。手は足は、動く動く。
興奮に充満した空気が喉のサロンと破つて寒空に消える。と、微笑の呼吸が隔から隔まで響いて、熱し切つた男女の視線がはったり中央に十字を描いて火花を散らす。
賑やかさ。若者達の敏達に酔ふてゐる時突然横の方から

「貴男踊りません？」
時に優しい女の声だ。若い女が立つて居る。
その胸は半鐘を打つる踊りを見るのは生れて之が最初。勿論踊るぢやない。恍惚たる酔も一時にのりかき冷汗が茶中に流れる。頭がぐらぐらして目眩くらみぞうだ。暖へる心を静めようとするけれどもどうしても静まらぬ。若い女が前に立つてゐるのだもの……。
漸やく息を静めて真正面に彼女を見る事が出来た。優しい眼をした色白の若い娘だ。
瞳みが何と、覗いて居る。
無言のままに立ち上つて私は彼女の後に隠つた。

何処へ行くのだらう……。
スイ〜と美しい香りを放ちながら、サロンから三部屋ばかり離れた應接間に入つて行く。
スチヤウを中にして五六脚の椅子が置いてある。静かに腰を下ろすと、又私は暖へ出した心を静めやうとするけれども、今度はどうしても静まらぬ。
誰か見てもないだらうか……。
恥かしたに胸も張り裂けるはかり……何と云ふ意気地かした。

無言のままに時を過ごして行く。
上目づかに女の顔を見ると優しい眼を尚優しくして顔全体に笑をへ寄せ、此方を見つめる。

「何ぞ御用です？」
余り固くなつて、漸く之だけの事を云ふたけ。
余り突然なので、其の音が静か空にピンとひびく。夜はしん〜と更けて行く。若者達の足並、笑声、夜氣を通してがすがに漏れて来る。
「い、別……貴男を……知つて……しやる……せよ？
妾は貴男を……存じ……居ります……御名前……でも妾の様なもの……」
後の句を云ひ流してゐる。果たして此の女が僕を知つて居るか……？

嘘！ 嘘！ 知つてゐる道理がない。若し眞実に知つて居るなら僕だつて顔位は見えて居るはずだ……
彼の女が……
きらり、彼女の瞳がさやく。燃えてゐる。燃えてゐる。狂はしげだ。
お、何んと云ふ瞳だらう……

X X X X X
「又いらつしやれね」

私は無言のまま、外へ出た。あの瞳にみせられた……
何処を何う彷徨つたのぞ知らず、まるで天国へでも昇
つた様か、持て足にまがせて歩み続けた。何がと求め
くる様に……
本の扉があつてから私は物思ふ人間となつてフラクと
来る日を過してゐる。
今更の元氣も何処へやら消え去つたらしい。
時々思ひ出した様に私は或る一点を凝視して苦笑を浮
べらる。

(おわり)

夢二つ 妻子

雨の夜。物淋しく更ける夜。
彼は何となく憂鬱に胸をうたれる。
そつと一茶の句集を繰つて見た。
「堂守と撞木に寝たり秋の雨」

なんとなくしたしめる雰囲気だと考へる。

彼は悠哉の世界を思慕する。

彼の視覚は如々現実から遠くした。

彼は時代を経た古色蒼然たる夢に描く夢を
したくなかつた。

だが時代の思潮はこの夢をソツとそのまゝに
受け入れない。

夢をさませ。汝の夢は俺の拳闘で打砕いた。と
誰か、洪笑する言葉が聞こえる。

夢の一步外は血まじりの階級争闘の波が寄せ
返し返しては寄せらる。

あらゆる層に於ける対立がいちいち強く張り切つた
雰囲気の中で、鏑を削つてゐる。

彼がおそる（目と聞いた時、これらの血まじりの
実がはげしく彼を刺戟した。

最早や彼は幽寂の思慕にのみ自己を強いる争が
ふくまひつた。

彼には一つのジレンマが巻起つた。

古色蒼然たる夢に描く夢は決してにのろむ空気を
はたかぬ。最早や彼は其知に立止れない。

静かに更ける雨の夜、ジレンマが彼に深いためを

俳句雑詠 晩茶

ベンツの妻子いとしや半時間。
闇の路を身つめて語りけり。
口笛や我輩淡し霧の朝。
菊枯れて庭うら淋し旅心。
抱む夜や寝がへりうちて鶏の声。
又讀むも心衰れし秋の暮。
茶の喫みて又もぐりどむ寝巻かか。
乳呑の兒とあやしても見し寝醒め哉。
化粧顔手許すまじ工女かた。
娘ふれぬ鮫魚、は悲語り。
(夢園の花の一頁より)

はき出させた。

X X X X X X X X X X

げに儘からぬものは世の中だ。
不満・不自由・この生活がこの頃の私の生活のすべて
を支配してゐる。
人の心を解する事を知らない勝手気儘ふ○○○○。
常識の赤い××××。
道徳心・人情・羊寄生蟲のヤモモ程も持ち合せないエゴ
イスマふ○○。
漱石の言ふ所謂三角術？の名人。
俺の心は一体何処まで荒んで行くんだ。
不自由の怒罵
不自由の爆発
所謂○○○に対しての反逆者だ暴徒だ
吾々は自由に……放たれた籠の鳥の様に
自由へ
満足へ
それはすべて夢か……
今の自分は反省して見たくない。
熱……熱……それに燃えて、只それに生きま行
きたい。
斯んぶ束縛された自分自身をみつめたくない。
自由に、不満と不自由と不自由として戦ひ
然して突き当って行きたい。
友よ許せ、自分は今こころした散漫な心にとらはれて
ゐる。

一三〇・六・二五

俳句 十五年振りに歸朝する日

峰 影子

歸雁一羽 銀河時雨簾おそし。
玉手箱持たぬ浦島老いおせず。

(六月廿一日「五ノスアイレス」にて)

民謡 出 船 小夜男

ふんぼ泣いたとて
今宵は出船
やる瀬太いそえ
涙雨

外はまつ暗
淋しい夜だ
あれさガンガラ
ドラッなる

ふんぼ泣いたとて
今宵は出船
沖にや
千鳥の別れ唄